

修了式 校長講話

皆さんおはようございます。校長の高橋です。令和4年度修了式にあたって、お話をします。

さて、2月の合唱祭、2年生は3月の修学旅行、先日の球技大会、それぞれの実行委員の皆さんお疲れさまでした。合唱祭は、合唱で心のこもった素晴らしいハーモニーを聞かせてくれたばかりでなく、聞く皆さんの態度とても立派でした。皆さんの持つ文化的な水準の高さを見せてくれた行事でした。特に2年生が合唱祭が初めてとは思えない実力と演技を見せてくれたことによって、1年生にそのバトンを引き継ぐことができたのではないかと思います。来年度の体育祭、杉高祭も皆さんの生き生きした姿を楽しみにしています。3月4日に第68回卒業式を挙行了しました。2年3組の浅野さんの送辞は卒業生に対する敬意と心がこもった優しいものでした。3年2組の柴原さんの答辞は3年間のわずかな無念さとそれでも充実していた高校生活を振り返る思いのこもったすばらしいものでした。私が式辞で卒業生に送った松下幸之助氏のことばは校長室前に掲示していますので、読んでみてください。

さて、一昨日3月15日に2年生のスピーチコンテストが行われました。13人の代表が素晴らしいスピーチを披露してくれました。1年生のレシテーションコンテストも素晴らしかったです。入賞者の皆さんおめでとうございます。その際、私もスピーチを行い、「バッタを倒しにアフリカへ」前野ウルド浩太郎著（光文社新書）という本を紹介しました。今年度皆さんにお話し続けてきたことの一部が語られていますので、1年生にも聞いてもらうために、今日は日本語で紹介します。2年生は復習のつもりで聞いてください。

前野さんは、小学校の頃に読んだ科学雑誌の記事で、外国で大量発生した

バッタを見学していた女性観光客がバッタの大群に巻き込まれ、緑色の服を食われてしまったことを知りました。前野さんは「ファーブル昆虫記」を読んで、感銘を受け、将来は昆虫学者になろうと考えていたためその女性をうらやましく思ったのです。それ以来、緑色の服を着てバッタの群れに飛び込み、バッタに服を食べられながら全身でバッタと愛を語り合うのが夢になった。著者の夢はという子供のころからの夢を叶え、バッタの大群に巻き込まれながら、アフリカの食料問題も解決できる。その上、研究成果をあげれば、日本の研究機構に就職が決まると考え、31歳の春にアフリカへ行った。目的地は西アフリカのモーリタニアである。日本の国土のほぼ3倍を誇る砂漠の国で当時日本人は13人しか住んでいない国である。人類を救うため、そして、自分の夢を叶えるために、若い博士が単身サハラ砂漠に乗り込み、バッタと大人の事情を相手に繰り広げた死闘の日々を綴った一冊です。

ここからは、私のスピーチです。

難しいことは、ほとんど書かれていません。税関で、現地に持ち込もうとしたビールを没収されたり、運転手のティジャニとの友情が芽生えたり、バッタの大群の発生を解決しに行ったのに、バッタが全く現れなかったり、バッタを子供たちから買い取ろうとしたら、大混乱が起こってしまったり、パスタや現地の食事やバッタの情報を得るために山羊をふるまうなど食事に関する記述が多かったりなど研究記録というよりは、旅行記のような内容です。非常に軽妙な文体で書かれていますので、楽しく読み進めることができます。現地では言語もモーリアタニア語とフランス語のみが通じ、英語ができる人が限られている中で、身振り手振り、自分たちの言語を創作しながら、コミュニケーションをとっていきます。ある世界的な実業界の方が、「自社商品売りに世界に出ていくことが重要であって、言語は必要だが、完璧でなくともよい」という言葉を思い出しました。こんなに

も予想外のことがばかりが起きているのに、前向きに自分の夢や使命感に向き合っていく筆者にいつの間にか応援している自分に気が付き、心を打たれました。

グローバル人材とは、世界に向かって挑戦すること、今後は文理融合の時代が訪れ、科学的な視点を持たなければ、世界規模の課題は解決できないこと、自分が大好きなこと、課題をもって、これからの人生を歩んでほしいことを皆さんに、伝えたいと考えこの本を紹介しました。

最後に、2年生は4月から最終学年となり、希望進路の実現に向けて準備を頑張ってください。また、1年生の皆さんは春休み期間中、部活動や新入生歓迎にそなえて頑張ってください。何か困ったことがあったり、悩みがあったら、一人で抱え込まずに先生や校長、副校長来年度の4月6日の始業式に全員元気な顔で会えるのを心から願っています。私からの話は以上です。